

19年度実習報告
日本語教育学（ロングゼミ）フィールド言語学野外実習の記録（塚原佑紀作成）

人文科学研究科日本語教育学教室では、小笠原村父島において2007年8月12日から18日までの6日間にわたり、首都大学東京小笠原研究施設を拠点として、フィールド言語学の野外実習を行ないました。

調査は主に現地の欧米系島民の方を対象として、アクセントの聞き取りとオーラルヒストリーの収集を行ないました。この野外実習はフィールド言語学の方法を学ぶことが目的でしたが、現地の人々と大いにふれあい、小笠原独特の文化や風土にも十分に触れ、フィールド言語学の魅力を十分に味わうことのできた充実した6日間でした。

写真はアクセント調査のようす。調査に協力していただいたのは高岩和慶さん。調査者は左から下川明日美と唐川恵美子。

調査に協力していただいた方との記念写真。

フィールド言語学の醍醐味の一つは現地の人とのふれあいです。調査者は中川幸士。調査に協力していただいたのは大平京子（Edith Washington）さんです。



データ整理の風景。手前から、磯野英治・今村圭介・血脇洸寿と塚原佑紀です。



調査の結果を録音した資料を聞いて、分析をしているようです。保坂希美（左）と中川幸士。



調査結果はパソコン上で保管し、データを共有します。左から中川幸士、横川直子（パソコンの前）、保坂希美、唐川恵美子。



レイ作り教室に参加しました新井正人（左）と中川幸士（右）。レイ作りの先生を努めたのは、アクセント調査に協力していただいたセーボレー・サーヤさんでした。（写真中央）。



小笠原島民の方々との交流会のようす。左手前におられるのは大平レンス（Rance Washington）さん。血脇洗寿（後）、今村圭介（中）、唐川恵美子（右）



データ整理の様子。手前にいるのは下川明日美と新井正人。



南洋踊り講習会のときに、カカ(丸太を使った、南洋踊りの演奏の際に使われる小笠原独特の楽器)を触らせていただきました。島の音楽家池田望さんにカカを教わる保坂希美。



南洋踊り講習会のあと、メンバーで記念撮影をしました。(後ろ左から)唐川恵美子、中島千明、新井正人、磯野英治、血脇洗寿、塚原佑紀、今村圭介、横川直子。(前)下川明日美、ダニエル・ロング、中川幸士、保坂希美。



2007/08/27 京都精華大学4回生 中島千明

私が卒論で取り上げるバイオリージョン(生命地域主義)の思想はまさに小笠原の欧米系島民の思想(→この地域に住まざるおえない現実、この島にしか生きることが出来ない現実があったことも含む。)とリンクする部分があると思います。人のアイデンティティーを論ずる論文は難しく、一概に言えないことも多いし表記一つで誰かを傷つけることがあるかもしれません。だからこそ、慎重に、誰を批判することもなく、私は書きたいと思っています。今回の調査で、フィールドワークの手法やコミュニケーションの取り方や話の展開の仕方など、調査に留まらず、これから社会で生きていく上で大切なことの多くを学びました。見ているだけで伝わり、勝手ながら良い部分は真似しようと思って盗みました！ありがとうございます。島民の方々に失礼のない論文を書くこと、そして自己満足を目指し、12月まで取り組みたいと思っています。

2007/09/02 M1 磯野英治

夏期休業を利用して行われた9日間の「フィールド言語学教育実習：小笠原調査」では、小笠原諸島父島に住んでいる欧米系島民のアクセント調査、オーラルヒストリーの作成を行った。

今回の調査で地域社会に赴き、そこでの生活に参加しつつ聞き取り調査や資料を収集、分析することの大切さを経験することができ、大変良い経験になったと感じる。言語を研究対象とする場合、実際にその言語が使用されている場所でフィールドワークを行うことは、より現実的な研究を行うという点で重要であろう。

また実習担当教官の「言語学はフィールドワークが大切である」という言葉にも実感を伴うことのできた教育実習だったので、今後自身の研究を行う際にも是非活用していきたい。

2007/09/08 M1 保坂希美

2007年8月11日から19日まで、小笠原に行き、初めてフィールドワークに参加し、調査方法を実践的に学んだ。調査内容は、欧米系住民のアクセント調査とオーラルヒストリーだった。アクセント調査はただ質問すればいいというものではなく、なぜその調査をするのか、調査者側がどんな事を知りたいのか始めに説明しなければならないという事を知った。また、オーラルヒストリーは、被調査者に発してほしい単語などが含まれた内容の話の調査者側が引き出すということをしなければならないという事を知り、とても勉強になった。今回の実習で、フィールドワークというもの、フィールドワークの仕方を学び、充実した8日間となった。

2007/09/09 M2 新井 正人

昨年参加した小笠原での調査経験を活かし、今回の小笠原でのフィールド言語学の野外実習での教育活動を補助した。具体的には、インフォーマントとの面接調査の際、どのようにインフォーマントと接し、自然談話を収録することが出来るのかを示す事が出来た。また、スケジュール管理を行う事で、円滑に野外実習を進める事が出来た。今回の野外実習での教育活動は、参加したそれぞれの人が小笠原の言語学的特徴を感じる事が出来たのではないかと思います。

2007/09/11 天理大学 国際文化学部 欧米科 4回生 中川幸士

今回のフィールド言語学実習を通して、言語を学ぶに必要な調査能力だけではなく、何かを学ぶにあたって人と接触し、聞き取り調査をするという事の難しさと楽しさを知る事ができました。このような実習は私にとって初めての経験であり、現場で「本物の調査」を学べた事が一番の成果だと思います。質問の仕方や、

話の進め方の駆け引きを肌で感じる事ができました。

2007/09/18 学部3年 横川直子

今回の調査では欧米系島民のアクセント調査を行い、道しるべを作成した。初めて民家を訪ねる調査をしたが、アクセント調査だからだといってアクセントをとるだけではなく、島民の方々といろいろな話をする機会を得た。初めて飛び込む環境のなかでも、積極的に話をして話者の緊張を解かねばならず、調査の難しさを知った。同じ東京だけれど、風土の違う小笠原での生活の事を知ることができていい経験になった。

2007/09/19 M1 塚原佑紀

今回の小笠原での言語調査は小笠原ことばを通して言語の奥深さを改めて実感し、またフィールド言語学自体の魅力を再確認できたという点で、自分にとって非常に有意義であったと思う。

小笠原では(1つの言語体系の中の方言というレベルを超えているという意味で)まったく異質な言語が混ざり合い、今日の小笠原ことばが生まれた。小笠原ことばの中ではまったく異質なそれぞれの言語が違和感なく混ざり合い、共存している。自分はそこに言語接触によって新たな言語が生まれる瞬間に思いを馳せ、感慨深くインフォーマントの話聞いていたのであった。ことばだけでなく、南洋踊りや小笠原古謡にも異なる文化の接触と混交が見られたが、異質なものが混ざり合って新たに一つの何かを作り上げること——これほどまでにそれを実感できるのは小笠原しかないのではなからうか、と私は思った。

2007/09/20 東京外国語大学1年 唐川恵美子

私が小笠原での1週間で学んだことは、2つあります。

1つは、人との出会いがいつも私を刺激してくれるということです。島の人が語ることは、どれもが私にとって新しいことで、話を聞いたたびもっと知りたいという気持ちになりました。

もう1つは、そのように自分にいつも刺激をくれる出会いを大切にすることです。島に来る前、私はなるべく多くの人とたくさん話をしようと思気込んでいましたが、1つ1つの出会いにもっと集中力を傾けて、相手の話を聴くことの大切さを実感しました。小笠原で得た多くの体験をもとに、これからも自分の研究を深めていきたいと思います。

2007/09/20 M2 下川明日美

小笠原を訪れるのは、昨年の夏以来2回目でした。今回の調査では、地域名や小笠原独自の呼び名をはじめとするイントネーションに関する調査が中心となっており、わたし自身より小笠原のことばそのものに興味を持って、取り組めたと思います。また調査の際であったり、町中であったり、さまざまな場面で島の人々と触れ合う機会があり、そういった機会のひとつひとつが自分自身の勉強の糧となっていくように今後につなげていくことができると感じる調査でした。この機会を得ることができたこと、非常に感謝しています。

2007/10/02 M1 血脇洗寿

今回の小笠原での言語調査は小笠原に住む欧米系島民のアクセント調査とオーラルヒストリー調査であったが、自分にとってとても良い経験だったと思う。自分にとっての大きな収穫はフィールドワークの面白さを知ることができたということ。フィールドワークの魅力はさまざまな人と接することができると思う。人と接することによって言語のみならず、その土地の文化や歴史にも触れることができるのはとても貴重である。今後もこれを機に積極的にフィールドワークを行っていききたいと思う。

2007/10/02 首都大学東京都市教養学部人文社会系国文学専攻3年 今村圭介

今回の小笠原諸島でのフィールドワークでは今後の自分の学問、研究の鍵と成るであろうものを学んだ。このフィールドワークではアクセント調査が主な目的であったが、もっぱら人と話をしたりイベントに参加したりすることに時間を費やして島の理解を深めていくことができた。この小さな島の複雑な歴史や情勢を知るには島民の話聞くのが一番の近道であって、それができたことが何よりの収穫であった。そして島の研究の第一人者であるロング准教授のそばで様々な話を聞くことができたことも大きなことであり、これらの話の中で自分の興味のある事柄について数多く聞くことができ、今後の勉学への良い刺激となったと同時にいかに自分が無知であるかと思知らされた。今回のフィールドワークが自分にとって貴重なものとなったことを皆さんに感謝したい。